

1月10日は成人の日でした。今回は、朝日新聞の1月10日付けの社説から「成人の日—仲間とのつながり世の中へ」を紹介します。

「僕は二十歳(はたち)だった。それが人生でもっとも美しいときだなんて誰にも言わせない」

成人の日を迎える君は、この一節を聞いたことがあるだろうか？フランスの作家ポール・ニザンの著書「アデン、アラビア」(小野正嗣訳)の書き出しである。青春は美しいと大人は言う。これに反発する若者たちの異議申し立てを、普遍的に表した一文だ。だがその大人の目にさえ、君を取り巻く状況は厳しく映る。とても「美しいとき」ではなからう、と。

1990年、東京証券取引所の新年は株価暴落で明けた。バブルの崩壊である。その後、株価も地価もなかなか元には戻らない。君は経済が右肩下りの時代を生きた初めての世代のなかにいる。「失われた20年」の長期停滞から抜け出せない日本は、前例のない少子高齢化社会に突入している。君たちの肩には今後、国の抱える膨大な借金と、増え続ける年金や医療費の負担がのしかかる。そのうえ就職難だ。バイト代だって頭打ちが続く。アジアの他国が台頭するなか、君たちは、内向きだ、草食系だ、専業主婦願望が強いなどと評されてきた。中国や韓国の若者に比べ、ガッツがないと責められ、「龍馬、いでよ」「坂の上の雲はどこへ」とせつつかれる。こんな世の中にだれがした、と文句のひとつも言いたいところだろう。しかし電車でゲームや携帯に没頭する君たちを見ると大丈夫か、と心配が先に立つ。世間の情勢を知れば、暗くなるからと、現実から目をそむけているのではないかと疑いたくもなる。年配者の杞憂(きゆう)であれば幸いだ。君たちは携帯やデジタル機器とともに育った。雲は坂の上ではなく、インターネットのクラウドにあり、フェイスブックを通じて、世界中の人々と重層的につながってゆく可能性がある。

大人たちはかつて、「人生の目標は自己実現だ」なんてカんでいた。でも君たちは何か違うものをもっている。「それは仲間」なのだろう。仲間とつながることはとても大切だ。新成人は124万人。初めて人口の1%を切った。数の上ではマイノリティーだ。だからなおさら、お互いにつながりを求めることは悪くない。でも仲間とだけではなく、いろんな人と話してみてもはどうだろう。電子書籍を持って町に出る。知識を求め、自分たちの置かれている状況を知る。そのうえで仲間と連帯して世の中を変えていく志を持つことだ。高杉晋作の句を、厳しい時代にこぎ出す君へのエールとしたい。

「おもしろきこともなき世をおもしろく」こんな精神で世を渡って欲しい。

1)今年成人式の若者が生まれた年は何で明けましたか？

()

2)成人式の若者の肩にのしかかる問題は何ですか？

()

3)あなたの成人式の時の夢・目標は何でしたか？それはかないましたか？

()